

世界代表司教会議第 16 回通常総会

第 2 会期

黙想会①

2024 年 9 月 30 日 (月)

ティモシー・ラドクリフ神父 (ドミニコ会)

復活：暗闇の中で主を探し求める

ヨハネ 20・1-18

昨年の黙想会では、互いに耳を傾ける方法について話し合いました。どのようにすれば、わたしたちは希望をもって互いの違いに向き合い、心を開くことができるのか。いくつかの障壁は崩れ去り、わたしたちは意見の異なる相手を敵対者としてではなく、同じ弟子、同じ探求者として見るようになり始めました。

今年は、「宣教するシノドスの教会となるには？」という新しい視点に焦点を当てます。しかし、わたしたちが行うすべてのことの基礎は同じです。忍耐強く、想像力に富み、知的で、心を開いて聴くことです。前会期の黙想会と同じ話を繰り返そうかとさえ思いましたが、皆さんは気づくでしょう！ハーバート・マッケイブ神父 (ドミニコ会) は、著名な神学会で講演をすることになっていたことに土壇場で気づきました。彼はファイルから講演録を取り出し、バイクに飛び乗り、時間ぎりぎりに到着しました。ノートを開くと、彼は 1 年前にも同じ学会で同じ講演をしていたのです。わたしは、「どう、対処したんですか？」と尋ねました。「ジョークは省きました。誰もが覚えているのはジョークだけだから」。皆さんの記憶力はそれより良いでしょう。

深く耳を傾けることは、今年わたしたちが行うすべてのことの基礎です。『討議要綱』によれば、それは「教会の最初の行為」(60 項) です。詩人のエイモス・オズは祖父についてこう語っています。

「祖父は、ただ丁寧に話を聞くふりをしながら、彼女が話を終えて黙ってしまうのをせっかちに待っていたのではありません。相手の話に割って入って、彼女のために話を終わらせることもしませんでした。彼女の話に要約して別の話題に移ろうと切り出したりしませんでした。相手が話し終えたら自分が返事をしようと頭の中で準備している間、相手の話を宙に浮かすようなことはしませんでした」¹。神と兄弟姉妹に耳を傾けることは、聖性の原理です。

今年は、「暗闇と死の陰に住む」世界に対して、「復活した主とその福音をのべ伝えるという一つの使命」(『討議要綱』序) を振り返ることにしましょう。(ルカ 1・79)。わたしたちの黙想の指針として、聖ヨハネの福音書から四つの復活の場面を取り上げることしましょう。「暗闇の中で探し求める」、「鍵のかかった部屋」、「岸の見知らぬ人」、「主との朝食」。それぞれが、十字架につけられたわたしたちの世界において、宣教するシノドスの教会となるためにはどうすればよいかについて、何らかの光を与えてくれます。

¹エイモス・オズ『愛と闇の物語』ヴィンテージ、ロンドン、2005 年、p.110。

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った」(20・1)。これは今日のわたしたちも同じです。わたしたちの世界は、1年前よりもさらに暴力で暗くなっています。彼女は愛する師のご遺体を探しに来たのです。わたしたちもまた、主を探すためにこのシノドスに集まっています。西洋では、神はほとんど姿を消してしまったように見えます。わたしたちが直面しているのは、無神論というよりも、蔓延する無関心です。懐疑主義が多くの信者の心をも蝕んでいます。しかし、すべてのキリスト者は、夜明け前のマグダラのマリアのように、主を探し求める人なのです。

わたしたちもまた、暗闇の中にいると感じているかもしれません。前会期の総会以来、このシノドスの参加者を含め、非常に多くの人々が、何かが達成されていくのかどうか、と疑念を表明しています。マグダラのマリアのように、「なぜわたしたちの希望を奪ってしまったのか。わたしたちはシノドスに多くを期待していたのに、おそらく、ことばが増えるだけかもしれない」と言う人もいます。

しかし、暗闇ではあっても、主はすでにマグダラのマリアとともに、そしてわたしたちとともに園にいます。イエスは生前、こう語っています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(12・24)。その種は、アリマタヤのヨセフとニコデモによって庭の豊かな土に蒔かれ、誰も使ったことのない新しい墓に蒔かれました。それは今まさに花を咲かせようとしているのです。夜明けは近い。マグダラのマリアのように、わたしたちも主との出会いに心を開くなら、探し求めるもの以上のものを受け取るでしょう。

園でわたしたちは、3人の探求者に会います。マグダラのマリア、最愛の弟子、そしてシモン・ペトロです。それぞれがそれぞれの方法で主を探し求め、それぞれの愛し方があり、それぞれの空虚さをもっています。これらの探求者はそれぞれ、希望の幕開けにおいてそれぞれの役割をもっています。ライバル意識はありません。彼らの相互依存は、シノダリティの核心を体現しているのです。わたしたちは皆、彼らの少なくとも誰か一人に自己投影することができます。皆さんにとってはどの人でしょうか？

トマス・ハリックは、教会の将来は、わたしたちの社会の道を探し求める人に手を差し伸べることができるかどうかにかかっていると主張しています。これらの人々はしばしば「無である人」です。わたしは、瞑想する修道女を意味しているのではなく、無宗教であると主張する人々を指しています。彼らはしばしば自分の人生の意味を探し求めています。ハリックは、キリスト者はこのように、「求める人とともに求める人となり、問う人とともに問う人」となることを厭わない人間でなければならないと書いています²。

復活に関する記述はすべて問いに満ちています。マグダラのマリアは2度、なぜ泣いているのかと尋ねられました。彼女のご遺体をどこに置いたのかと尋ねます。なぜ墓は空なのかと。マルコの記述では、女性たちは「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」(16・3)と尋ねています。ルカの復活の記録は問いで満ちています。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」。イエスはエマオに向かう弟子たちに「その話は何のことですか」と尋ねます。すると弟子たち全員はこうなります。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか」(24・38)。復活は、事実を淡々と語るものではなく、問いかけとしてわたしたちの人生に飛び込んでくるものです。

²Tomáš HALÍK, *Patience with God*, Doubleday, New York, 2009, p.9.

深い問いは情報を求めるものではありません。それは、わたしたちを新しい生き方へと誘い、新しいことばで語ることを求めています。詩人ライナー・マリア・リルケはこう書きました。「重要なのは、すべてを生きることだ。今、問いを生きなさい。そうすれば、いつか遠い未来に、気づかぬうちに、少しずつ答えに近づいていくだろう」³。

復活とは、短い中断のあとに再び始まるイエスのいのちではなく、死が克服された新しい生き方なのです。そしてそれは、福音書の中で、まずわたしたちの生活の中に、同じように生きることを許さない、切迫した問いとして炸裂するのです。同じように、わたしたちも教会における女性の役割など、多くの問いを抱えたままこのシノドスに臨んでいます。これらは重要な問いです。しかし、単に何かが許可されるか拒否されるかという問いと見なすことはできません。それでは、これまでと同じような教会であり続けることになってしまいます。わたしたちが直面する問いは、福音書にあるようなものであるべきです。福音書は、わたしたちが復活のいのちを、ともにより深く生きるよう招いているのです。

そして、わたしたちの心の中にあるもっとも深い問い、わたしたちを新しいいのちへと誘う不穏な問いを、あえてこのシノドスにもち込まなければならないのです。園にいた3人の、主を探し求める人のように、わたしたちが教会としての新たなあり方を見出すためには、互いの問いに耳を傾けなければなりません。もしわたしたちが何の問いももたなければ、あるいは表面的な問いしかもたなければ、わたしたちの信仰は死んでしまいます。今日は出席していませんが、ある大司教がドミニコ会の修練者たちに言いました。「聖トマス・アクィナスの『神学大全』を必ず読んでください。そこには、カトリック教会を批判するすべての人々に対する5万6千の答えが含まれています！」⁴。聖トマス・アクィナスがこれを聞いたら、恐れおののくでしょう。伝説によれば、幼少時の彼の最初の問いは「神とは何か」であり、その聖性さのゆえに、彼はいかなる答えも拒否しました。というのも、わたしたちは未知のものとして神と結ばれているから、と彼は言ったそうです。

尊敬の念をもって、恐れずに互いの問いに耳を傾けるなら、わたしたちは聖霊に生きる新しい道を見出すでしょう。昨年も申し上げましたが、バグダッドのドミニコ会・アカデミーのモットーは「ここではいかなる問いも禁じられない」です。わたしたちはマグダラのマリアであり、最愛の弟子であり、シモン・ペトロです。わたしたちを待っておられる主を見つけるのは、ともにいるときだけなのです。

それぞれ、主を探し求める人を見て、現代の探求者に手を差し伸べることについて、彼らがわたしたちに何を教えてくれるかを見てみましょう。マグダラのマリアは優しい愛に魅かれてています。それは地に足のついた、肉体的な、肉と血の愛です。彼女は最愛の主のご遺体をいたわりたいと願っています。マグダラのマリアは、この世の傷ついた人々への慈愛に駆られながら生きるすべての人々の象徴です。コルカタの路上で主のご遺体を探し求めたマザー・テレサ。ハワイでハンセン病に苦しむ人々にいのちをささげたモロカイ島の聖ダミアン。

キリストを知らないにもかかわらず、苦しんでいる人々へのあわれみに満ちている、何百万という人々のことも考えてほしいと思います。マグダラのマリアのように、彼らは傷ついた人々のご遺体を探しています。世界は涙に満ちています。前会期の総会4日目、ハマスが中東を戦争に陥れる、恐ろ

³ライナー・マリア・リルケ『若き詩人への手紙』、手紙4、1903年7月16日。N.D.ヘルター・ノートン訳、W.W.ノートン社、1934年。

⁴Paul MURRAY OP, "Dominicans and Key of Knowledge", A Talk to Dominican Friars studying in Rome - PUST, Angelicum, 19 February 2023.

しい残虐行為を行いました。ウクライナやロシアでも、スーダンやミャンマーでも涙が流されているように、何十万人もの若者の死と負傷で人々は泣いています。教皇によって招集された研究部会の一つは、「貧しい人々の叫びに耳を傾ける」と称されています。「泣いている人の叫びに耳を傾ける」とも言えます。マグダラのマリアは彼らの保護者です。

その時、マリアは自分の名前を耳にします。慈愛に満ちた、優しい愛に突き動かされて生きているマリアが、その空虚さを自分の名で満たされるのはふさわしいことです。彼女のご遺体を探しましたが、夢見た以上のもの、永遠に生き続ける愛を見つけたのです。わたしたちの神は、いつもわたしたちを名前で呼んでくださいます。ヤコブよ、あなたを造られた方、イスラエルよ、あなたを造られた方、主はこう言います。「恐れるな、わたしはあなたをあがなう。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」（イザヤ 43・1）。

彼女の名は出会い、主の臨在を意味します。洗礼式で最初に行われるのは、名を尋ねることです。「あなたの名前は何ですか」、あるいは「あなたは子どもにどんな名前をつけますか」。名前は、子どもたちを区別するために貼られる単なるラベルではありません。それでは、わたしは「子ども 4 号」になってしまいます。わたしたちの名前は、わたしたちが唯一無二の存在として神に大切にされていることのしるしなのです。「親愛なる兄弟、親愛なる姉妹の皆さん、国勢調査の過程で歴史を変えた神にとって、あなたは番号ではなく、顔です。……キリストは番号ではなく、顔を見ています」。

そして、わたしたちの使命もまた、暗闇の中でわたしたちを探してくださる神のみ名を指し示すことです。そして、互いの名と顔を大切にすることでもあります。わたしたちは、このシノドスで互いに存在し合ってこそ、神の臨在を媒介することができるのです。グレゴリー・ボイル神父（イエズス会）は、ロサンゼルスでギャングの若者たちと働いています。彼の奉仕職の秘訣は、彼らの名前を知ることです。彼らの正式な名前やニックネームだけでなく、母親が怒っていないときに彼らと呼ぶ名前もです。若いルーラを名前で呼ぶと、「わたしが感電させたのかと思ったでしょう。自分の名前が知られること、呼ばれること、大声で呼ばれることに喜びを感じて全身が痙攣するのです。横断歩道を通る間中、ルーラは振り返ってわたしを見つめ、微笑み続けました」⁵。

暴虐な政権は名前と顔を消し去ります。アウシュビッツで、聖マキシミリアノ・コルベ神父は「囚人 16,670 号」となりました。ロシア大統領はつねに、自分に勇敢に反対したアレクシー・ナヴァルニーの名前を呼ぶことを拒んできました。彼はただ「ある人物」だったからです。同様に、ネルソン・マンデラはアパルトヘイト政権反対の顔となりました。そして、彼が投獄されたとき、彼の顔の画像を公開することは禁止されました。国民の記憶から消されたのです。したがって、数十年の獄中生活のあと、彼が浜辺を歩くことが許されたとき、誰も彼のことを知りませんでした。彼の顔はその力を奪われていたのです。

このシノドスは、わたしたちが互いを思いやりをもって見つめ、わたしたちと同じように探求する人々を見るならば、恵みの瞬間となるでしょう。教会内の団体の代表や、あの恐ろしい保守派の枢機卿や、あの恐ろしいフェミニストではありません！ そうではなく、傷つきながらも喜びを感じている、主を探し求める仲間なのです。正直に告白すると、わたしは名前を覚えるのが苦手です。それはわたしの言い訳です。お許してください！

⁵ 同 47 ページ。

しかし、マグダラのマリアの優しい愛はいやしを必要としています。イエスは彼女にこう命じました。「わたしにすぎりつくのはよしなさい」。学者たちはこのことについて、いくつかの不合理な説明をしていますが、もっともありえないのは、イエスの傷がまだ痛んでいた、ということです！ イエスが言っているのは、マリアはイエスを私物化してはいけないということです。イエスの存在は彼女のものではありません。復活は、イエスの共同体の誕生です。「神の民とは、単に洗礼を受けた人たちの総体では決してなく、むしろ、教会の『わたしたち』（『討議要綱』3項）なのです。「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と」（20・17）。これはヨハネ福音書で初めて弟子たちを「兄弟たち（フラテッリ・トゥッティ）」と呼んでいます！ 彼女は自分の愛をあらゆる排他性から解放しなければなりません！ そうすることで、マリアは弟子たちに福音を伝える準備ができるのです。「わたしは主を見ました」。これはわたしたちの課題でもあります。わたしの「イギリス人イエス」や、わたしの「ドミニコ会イエス」にすぎりつくのではなく、わたしたち全員が兄弟姉妹となる主にすぎりつくのです！ イエズス会でさえもそうです。わたしたちが「わたしたち」と語ることが学ばなら、このシノドスは実りあるものになるでしょう。「わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方」。

そして、主が愛した弟子がいます。彼にも彼の愛し方があり、虚しさがあり、人生の光の消し方があります。彼は、息を切らし、喘ぎながら、年老いたペトロを暗い墓に先に入らせましたが、天使たちの間の空虚な空間を見て、信じました。これが見る力を与える愛です。*Ubi amor, ibi oculus*（サン＝ヴィクトルのリカルドゥス）。愛のあるところに眼がある。彼は愛の目で見ると、愛の勝利を見ます。彼の福音は驚きの福音であり、その目は太陽の光をまっすぐに見つめ、盲目にならないと信じられています。彼の探求はこの上なく神学的なのです。

わたしは今年、エルサレムの「聖書研究所」で2週間を過ごしました。兄弟たちは死の脅威にさらされながら、ガザから40分のところに住んでいます。彼らはそこにとどまり、神のことばを学び、教え、祈っています。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（ヨハネ1・5）ことのしるしとして、彼らはそこに留まっているのです。マグダラのマリアの空虚は、名——臨在——の呼びかけによっていやされ、愛する弟子の空虚は、空の墓に輝く光によっていやされます。だから彼は、ブレーズ・パスカルが言ったように、わたしたちの人生の意味、わたしたちの心の中にある神の形をした空虚さを理解しようとするすべての人々を体現しているのです。もちろん、キリスト教の思想家たちもそうですが、わたしたちの苦しみの暗闇の中に光を見出そうと奮闘するすべての人たち、つまり、暗闇の勝利を信じようとしない詩人、芸術家、映画製作者たちもそうなのです。聖トマス・アクィナスが異教徒のアリストテレスに対してそうであったように。聖トマス・アクィナスは、「真理は誰によって語られようと、すべて聖霊から出たものである (*omne verum, a quocumque dicatur, est a Spiritu Sancto*)」⁶と書いています。

そしてシモン・ペトロがいます。彼の虚しさは、失敗という、重荷の中でもっとも重いものです。彼は友を否定しました。きっと彼は、岸で最後に語られるいやしのことばを待ち望んでいるのでしょう。だから、わたしたちの司牧的使命感も、失敗と罪によって重荷を負っているすべての人に寄り添い、わたしたちが受けたゆるしと、「わたしのようなあわれな者を救ってくださった方」の驚くべき恵

⁶S T, I II, q.109, a.1, ad 1.

みを、わたしたち自身が発見したことを分かち合うことなのです。「わたしはかつて失われたが、今は見出され、盲目だったが、今は見える」。わたしたちの使命は、ペトロのように、わたしたちも必要としているあわれみ深い方の名を呼ぶことです。

ですから、この最初の復活の場面では、主がわたしたちの人生における三つの空虚に対応する三つの形の探求にどのように応えるのかを見ることができます。つまり、存在を探し求める優しい愛、意味と光を求める探求、そしてゆるしを求める探求です。それぞれの探求者は他の探求者を必要としています。マリアがいなければ、彼らは墓に来なかったでしょう。マリアは、主が現存されると宣言します。最愛の弟子がいなければ、彼らは墓の空虚さを復活として理解することはできなかったでしょう。ペトロがいなければ、彼らは復活が、あわれみの勝利であることを理解することはできなかったでしょう。

それぞれが、前会期の総会で何らかの形で排除されたと感じたグループを表しています。マグダラのマリアはまた、教会において女性がいかにしばしば正式な権威ある地位から排除されているかを思い起こさせます。正義とわたしたちの信仰が求める前進の道を、わたしたちはどのように見つければよいのでしょうか？ 彼女たちの探求はわたしたちの探求でもあります。前会期の総会では、多くの神学者たちも疎外感を感じていました。なぜわざわざ来たのだらうと思う人もいました。彼らがいなければ、わたしたちはどこにも行けません。そして、シノドス的な道を歩むことにもっとも抵抗感を抱いていたのは、司牧者たち、とりわけあわれみの牧者としてのペトロの役割を分かち合っている小教区で働く司祭たちでした。彼らなしには、教会は真の意味でシノドス的になることはできません。

ほとんどすべての人が、自分たちは排除された存在だと感じているとき、被害者意識を競い合うようなことはあってはなりません！ シノドスが、わたしたちが主を愛し、主を探し求めるあらゆる方法を必要としているように、わたしたちの時代の道を探し求める人を必要としているように、たとえ彼らがわたしたちと信仰を共有していなくても、主を暗闇の中で探し求めることは、これらすべての証人を必要としているのです。

これがどのように使命の中であふれるのか？ 以下はアントワーヌ・ド・サン・テグジュペリのことばです。そのことばは、彼が実際に書いたものよりずっと意義深いものです。「もし船を造りたいのなら、あなたの男女の部下を集めて命令したり、何をしなければならぬか、どこに何があるか、一つひとつ細かく説明したりしてはならない。……船を造りたいのなら、男女の部下の心に、海への欲望を生み出させなさい」⁷。人々に無限の世界を味わわせれば、彼らは自分なりの方法で船を造り、大海原へと旅立つでしょう。

これらの証人はそれぞれ、無限の愛に触れています。マグダラのマリアは無限の優しさに触れ、「最愛の弟子たち」は限りない意味を求めることに心を動かされ、ペトロは7回ではなく7の70倍ゆるす、限りないあわれみを求めることに心を動かされます。もしわたしたちが互いの無限の渴望に自らを開くなら、わたしたちは使命の船をこぎ出すでしょう。エフェソの信徒への手紙のことばにあるように、わたしたちは、「すべての聖なる者たちとともに、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」(3・18, 19) になります。

今日の午後、わたしたちは再び弟子たちを暗闇の中、鍵のかかった部屋で見出すでしょう。

⁷ 「船を造るということは、帆を編むことでも、釘を鍛えることでも、星を読むことでもない」(A. SAINT-EXUPÉRY, *Citadelle*, Gallimard, Paris, 1959, p. 687, trans. ours)。

世界代表司教会議第 16 回通常総会

第 2 会期

黙想会②

2024 年 9 月 30 日 (月)

ティモシー・ラドクリフ神父 (ドミニコ会)

鍵のかかった部屋

ヨハネ 20・19-29

午前中わたしたちは、弟子たちが暗闇の中を走り回り、主を探し求めている様子を振り返りました。最愛の弟子は見て信じます。夜が明けました。今は夕方で、また暗闇に戻り、彼らは鍵のかかった部屋で動けなくなっています。

はじめ、朝が暗いのは、彼らがまだ復活の主を見いだせなかったからです。夕方が暗いのは、復活した主の生きた息吹である聖霊に、まだ満たされていないからです。イエスは空の墓から飛び出しました。彼らはまだ鍵のかかった部屋という、墓の中にいます。創世記によれば、「主なる神は、土 (アダマ) の塵で人 (アダム) を形づくり、その鼻にいのちの息を吹き入れられた¹。人はこうして生きる者となった」(2・7)。そこでイエスは永遠のいのちの息を彼らに与えます。「聖霊を受けなさい。あなたがたはゆるす罪はゆるされ、あなたがたが留めおく罪は留めおかれます」。彼らは復活のいのちを共有しているので、宣教に遣わされる準備ができています。

今日の午前、わたしたちは、シノドスの教会の宣教が、マグダラのマリア、最愛の弟子、ペトロのように、復活した主を探し求める人となるようわたしたちに求めていることを知りました。ですから、わたしたちもまた、現代の探求者たちに寄り添わなければなりません。しかし、わたしたちが復活の宣教師となるのは、神のうちに生かされている場合だけです。今、人はゾンビを信じるでしょう。イレネウスのことばを思い起こしてください。*Gloria Dei, homo vivens*, = 十全に生きている人間こそが、神の栄光です。ラザロのように、わたしたちは鍵のかかった部屋からわたしたちを呼び出す主の声を聞くのです。「出て、生きなさい」。

聖性とは、神のうちに生かされていることです。シャルル・ド・フーコーのいところで、飲食を楽しむことが好きだった人物は、サハラ砂漠での長年の暮らしの後、パリに一時帰国したシャルルが訪ねてきたときのことをこう語っています。「彼の目の輝きと、とりわけその非常に謙虚な微笑みが、彼の全人格を支配していました。……彼からは信じられないほどの喜びが発せられていました。……わたしは、自分の満足の総和が、この修道者の完全な幸福に比べればほんのわずかな重さにもならないことを目の当たりにして、羨望ではなく、奇妙な尊敬の感情が自分の中に湧き上がってくるのを感じたのです」²。

アビラの聖テレジアについて、「自己を超えたいのちを熱狂的に意識していた」³とされています。あるいはまた、ビデオゲームに興じるハンサムなイタリアのティーンエイジャー、カルロ・アクティ

¹ここでは「*Ruah*」ではなく「*neshama*」。

²ファーガス・フレミング『剣と十字架』ロンドン 2003 年、235 ページ。

³ジョージ・エリオット『ミドルマーチへの前奏曲』1871 年初版。

スを思い浮かべてほしいと思います。ミレニアル世代は、真に生きている同世代を、ここに見ることができます。だから、わたしたちの課題は、若返らせる聖霊を深く呼吸できるように助け合うことです！ 80歳になったわたしにとって、ちょっとした挑戦です！

リーダーシップの最初の仕事は、群れを小さな羊小屋から聖霊の新鮮な空気へと導くことです。リーダーシップは、閉ざされた部屋の鍵を開けます。弟子たちは恐れによって閉じ込められています。そこで、わたしたちが神のうちに生かされ、豊かないのちの福音をのべ伝える人となることを妨げる恐れについて考えてみましょう。

わたしたちは皆、傷つくことへの恐れを知っています。わたしたちの中には、自分が認められ、受け入れてもらえないのではと、神経質になりながらこの総会に参加する人もいます。教会に対するわたしたちの大切な希望が、軽蔑されるかもしれません。わたしたちは透明な存在だと感じるかもしれません。拒絶される危険を冒してまで話す勇気があるのでしょうか。壮大な肩書きと奇妙な服装を身にまとったバチカンの世界に慣れていなければ、威圧感を感じるかもしれません。復活の主は、傷ついた方ですから、わたしたちはあえて傷つく危険を冒すのです。主はその手と脇腹を彼らに示します。

復活祭の叙唱はさらに踏み込んで「死に打ち勝って永遠に生きる (*sed semper vivit occisus.*)」と告げます。わたしの兄弟である、ハーバート・マッケイブ神父（ドミニコ会）のことは思い出してみましょう。「もしあなたが愛するなら、あなたは傷つき、殺されることさえあるでしょう。もし愛さないなら、あなたはすでに死んでいるのです」。神に生かされるということは、傷を恐れないということです。

エルサレムにあるわたしたちの修道院は、ダマスカス門の近くにあります。ここは旧市街がアラブ人居住区に面している、緊張感のある場所です。若いユダヤ人のグループが目隠しをしてそこに立ち、ハグを望む人に「フリーハグ」を提供していました。無償の憎しみに立ち向かう無償の愛。彼らは、ハグの代わりにナイフを受けるかもしれないという危険を冒したのです。

アラン・ペイトンは、勇敢にも、アパルトヘイト反対運動を展開した南アフリカの小説家です。彼の登場人物の一人はこう語ります。「わたしが天に昇るとき（間違いなくそのつもりですが）、大審判官はわたしに尋ねるでしょう。『あなたの傷はどこですか』。そして、もしわたしが何もないと答えれば、彼は言うでしょう。『何も戦わなかったのですか？』」⁴。

フィリピンで、わたしはハンセン病の病を負った女性に出会いました。彼女は人生の大半を、ドミニコ会の分派である聖マルティン兄弟会が運営するハンセン病療養所で過ごしました。彼らの多くもハンセン病に苦しんでいます。治癒しても、彼女はその場所を離れることを恐れました。人々は彼女の傷跡を見て怖がったのです。そしてある日、彼女はあえて外に出て、アジア中を旅し、ハンセン病に苦しむ人々を外に招いて生きるという新しい使命を発見したのです。

主がわたしたちに平安を与えてくださったからこそ、わたしたちは傷つくリスクを受け入れることができるのです。映画『神々と男たち』は、1990年代にテロ暴力が勃発したアルジェリアから逃れることを拒否したトラピスト修道士たちの物語です。共同体の年老いたの医師である、リュック修道士は、「わたしは死を恐れない、自由な人間だ」と言います。ドミニコ会の古いミサ儀式書では、司祭は平和の挨拶をささげる前に、キリストの流された血のカリスに接吻していました。

⁴Alan PATON, *Ah, But your Land is Beautiful*, Vintage/Ebury, Londons, 2002, pp.66-67.

最初の創造は「光あれ」で始まりました。新しい創造は「平和あれ」で始まります。このことばを口にしないわけにはいきません。マハトマ・ガンジーは、自分の部屋にイエスの絵を飾っており、そこにはエフェソの信徒への手紙から、「キリストはわたしたちの平和」(2・14)と引用されています。イエスは神の安息日であるのです。初代教会で、キリスト者の墓には、「平和のうちに」と書かれていました。わたしたちは、何ものにも破壊されることのないキリストの平和の洗礼を受けています。何も恐れる必要はないのです。

60年代後半、オックスフォードにあるわたしのドミニコ会共同体は、狂気の集団に襲われました。イエズス会ではありません！ 午前2時、修道院の正面の窓が二つの小さな爆弾ですべて吹き飛ばされたのです。わたしたちは全員起こされ、急いで駆けつけました。警察が来て、救急車も来しました。院長のファーガス・カー神父だけがまだ眠ったままでした。一番若い修練者が彼の部屋に送られました。「ファーガス、ファーガス、起きろ、爆弾テロがあったんだ」。「誰か死んだか？ 怪我人は？」「いない」「あっちへ行って。寝かせてくれ。朝になったら考えよう」。リーダーシップとしての、わたしの最初の教訓でした。

勝利は得られます。処刑人がディートリッヒ・ボンヘッフアーを迎えに来たとき、彼の友人であったチチェスターのベル司教への最後のメッセージはこうでした。「司教に伝えてくれ。……勝利は確かだ」。兄弟たちの一人が性転換するかもしれないし、会計係が金もち逃げするかもしれないし、教会が爆破されるかもしれない！ しかし、キリストは死に、復活し、再び来られるのです。

神の平安は、わたしたちが平安を感じることを意味しません。わたしの仲間である修練者、サイモン・ツグウェル（ドミニコ会）はこう記しました。「平安という主観的な感情が必要なわけではありません。わたしたちがキリストのうちにいるのであれば、平安のうちにいることができるのであり、したがって、平安を感じないときも動揺することはありません」⁵。おそらくわたしたちの多くにとって、もっとも深い課題は、自分自身と平和であることです。わたしたちは、悩み、分裂した自分自身の心、自分自身の嫌な部分を見つめる勇気があるでしょうか？ 自分自身の中にある恐れや嫌悪を他人に投影してしまうことは誘惑です。ツグウェルはまた記します。「平安は、冷静な自己認識とともに訪れます。……平和への道は、真実を受け入れることです。わたしたちが受け入れを拒否するわたしたちの断片はすべて敵となり、わたしたちを防御的な姿勢に追い込みます。そして、捨て去られた自分自身の断片は、急速に周囲の人々の中に化身を見出すでしょう」⁶。

教会に対するわたしたちの激しい愛は、逆説的に、わたしたちを狭量にすることもあります。わたしたちが愛する伝統を損なう、破壊的な改革によって教会が害されるのではないかという恐れです。あるいは、教会が、わたしたちの憧れである、広く開かれた家にならないのではないかという恐れです。教会は、教会を愛する、しかし違った形で愛する人々によって、しばしば傷つけられるのです！ 聖エフレムは、カトリック教会は「保護される大きな場所をもつ大きな教会」⁷であると言いました。オックスフォードで教鞭をとっていたドイツのルター派の一人の神学者に会ったことがあります。彼はこう言いました。「カトリック信者はプロテスタントになってきている、と危惧しています」。とき

⁵Simon TUGWELL OP, *Reflections on the Beatitudes*, Darton Longman and Todd, London 1980 p.114.

⁶同、112 ページ。

⁷引用：S. TUGWELL "Scholarship, sanctity and spirituality", *Communio* 11/1 (1984), p. 53.

にわたしたちは、「両方とも」というカトリックの幅広さを忘れてしまうことがあります。わたしたちが愛する真理は、ロバート・バロン司教が書いているように、「宇宙と同じくらい広く、イエスという人物と同じくらい具体的」⁸なのです。完全な愛は恐れを追い出します。教会観が違う人たちがもつ恐れを追い出しましょう。教会は主のみ手の中にあり、神は陰府の門がこれに打ち勝つことはない約束したのです。

ナポレオン時代、慌てたモンシニョールが心配そうに国務長官のコンサルヴィ枢機卿に会いに来て言いました。「猥下、ナポレオンは教会を滅ぼそうとしています」。それに対して枢機卿は答えました。「わたしたちでさえ、それに成功したことはありません！」。

わたしたちの教会への愛は、まったく違った形で、わたしたちを狭い世界の中に閉じ込め、教会のへそを見つめ、他者を観察し、その逸脱を見抜き、糾弾する準備をさせます。教皇フランシスコは選出される前、主は扉を叩き、香部屋から出るよう要求されるだろうと述べました！ もちろん、わたしたちの中には変化を切望する人もいますが、だからといってわたしたちを小さな教会の世界に閉じ込めてはなりません。それではつまらない！ 神は、宿営の外の、限りない地平をもつ山の頂きに現れるのです。

わたしたちがこれらの部屋から解放されるには、勇気だけではなく、神のいやしを授けるゆるしが必要です。「あなたがゆるす者の罪はゆるされ、あなたが留めおく者の罪は留めおかれる」。

罪によってわたしたちは、自己愛と党派政治の牢獄に閉じ込められます。まるで、放蕩息子の弟を家に迎え入れるパーティに、不機嫌で参加しない兄のように。ハーバート・マッケイブ神父は再びこう語ります。「わたしたちの本性は、何か新しく恐ろしいものへとわたしたちを呼び寄せます。……わたしたちは、自らを捨て、自らを超えることでしか、充実感や幸福や繁栄を見出せない種類の存在なのです。わたしたちは愛の中で、自らを失う必要があります。未知の世界に飛び込み、慣れ親しんだ安全なものを捨て、旅や探求に出るよう求められているのです。しかし、わたしたちはリスクを冒すことを好みません。神に似せて造られることを恐れているからです。こうしてのちへの招きに応えられないこと、この信仰の失敗を、罪と呼ぶのです」⁹。

ですから、今回のシノドスは組織的な変革について交渉する場ではなく、いのちを選び、回心とゆるしを求める場なのです。主は、わたしたちが避難し、他者を閉じ込めている小さな場所からわたしたちを呼び出してくださるのです。19世紀のオラトリオ奏者、フレデリック・フェイバーが作曲した聖歌はこう告げ知らせます。

「神のあわれみは幅広く、それは海の広さのようである」。

キリストの平和が、わたしたちの心に宿り、主を十字架につけた暴力を溶かしてくださるよう祈りましょう。ドロシー・デイは、「本当の戦いは、無神論に対するものというよりも、暴力に対するものです」¹⁰と主張しました。彼女は、「キリスト者は、武器によって、力によって、暴力によって、信仰

⁸Michael HEHER, *The Lost Art of Walking on Water : Reimagining the Priesthood*, Mahwah, Paulist Press, 2004 p.132.

⁹Herbert MCCABE, *God Matters*, Continuum, London - New York, 2005, p. 94-95.

¹⁰Dorothy DAY, *The Duty of Delight*, Marquette University, New York, 2008, p. 943.

を守ろうとするとき、わたしたちの主に向かって、『十字架から降りてこい。神の子なら、自分を救ってみろ』といった人たちと同じです」¹¹。ですから、今回のシノドスにおいて、わたしたちの心の中にあるすべての暴力、すなわち暴力的な考えやことばに打ち勝とうではありませんか。わたしたちの世界文化は暴力的な想像力を培っています。「18歳になるまでに、アメリカのティーンエイジャーは平均して20万件の暴力行為と16,000件の殺人事件をメディアで目撃しています¹²。多くの場合、暴力は美化され、ユーモラスなものとして扱われます。暴力は常態化し、ビデオゲームで悪魔のような敵をやっつけるような無害なものにさえ思えます。このような、一見罪のない娯楽は、暴力的な想像力をはぐくみ、破壊に罪悪感を抱かせなくなります。なぜなら、サイバー空間では、リアルなものは何もないからです」¹³。

キリストのからだは、残酷な非難、風刺画、憎悪に満ちた毒々しいウェブサイトによって醜くされています。教会で何らかの形でリーダーシップを発揮している人なら、誰でもこのような経験をしたことがあるでしょう。わたしは修道会総長のとき、一人の管区長が愛人である修道女と鉄道貨車の中で同棲する許可を与えた、と非難されました！

わたしたちの暴力的な世界は、多くの人々からのちの息吹きを奪っています。たとえば人種差別の罪は、文字通り人々の息の根を止めるものです。10年前、ニューヨークのスタテン島でアフリカ系アメリカ人のエリック・ガーナーが警察に首を絞められて殺されたとき、「息ができない」ということばが11回繰り返され、野次馬の携帯に録音されました。このことばはアフリカ系アメリカ人の叫びとなっており、彼らの抑圧を象徴しています。これは、2018年10月2日、トルコの領事館で殺害されたサウジアラビア人ジャーナリスト、ジャマル・カショギの最後のことばでもあります¹⁴。わたしたちは互いに呼吸する空間、議論のための酸素を与え合ひましょう。

この不滅の平和とは、わたしたちが完全に調和して生きることを意味するわけではありません。わたしたちがこの総会に集まっているのは、そうではないからです。しかし、いかなる不和も、キリストにあるわたしたちの平和を破壊することはできません。トーマス・マートンは『アジア日誌』にこう書いています。「わたしたちはすでに一つになっています。しかしそうではないと思ひ込んでいます。そして、わたしたちが取り戻さなければならないのは、わたしたちの本来の一致です。わたしたちがあるべきは、わたしたちがわたしたちであることです」¹⁵。

しかし、イエスが現れたとき、トマスは外出していました。彼は、恐れを知らなかったからでしょうか。ラザロが病気になったとき、トマスはエルサレムに上って、イエスと一緒に死んでもいいと宣言したのです(11・16)。トマスは真理に情熱を抱く人です。イエスの傷に指を入れない限り、「絶対に、決して信じない」¹⁶のです。そして、主を見て、「わが主、わが神」と熱く告白します。この情熱的な弟子もまた、わたしたちを小部屋から誘い出します。

「わが主、わが神」。これは文字通り神学的な表明であり、神についてのことばです。この総会のテーマは、宣教するシノドスの教会です。この宣教の中心は、わたしたちの教えを伝えることです。マ

¹¹ 同、895 ページ。

¹² 「子ども、暴力、メディア」、親と政策決定者のための報告書 上院司法委員会委員長 オーリン・G・ハッチ上院議員 (ユタ州)、上院司法委員会多数派スタッフ作成、1999年9月14日。

¹³ Timothy RADCLIFFE OP, *Alive in God : A Christian Imagination*, Bloomsbury, London, p. 197.

¹⁴ 同、262-263 ページ参照。

¹⁵ ナオミ・パートン他編『トーマス・マートンのアジア日誌』新版、ニューヨーク、1973年、p.308

¹⁶ Timothy L. FOX: "Jesus' Resurrection Appearances," 1 November 2019 ."

www.modernreformation.org/resources/essays/jesus-resurrection-appearances

グダラのマリアが名を呼ばれた時、彼女は「ラビ」、先生と答えます。聖マタイ福音書の最後のことで、イエスは弟子たちをすべての民族に教えるようにと送り出しています。意味に飢えた世界に、わたしたちはどのようにキリスト教の教えを伝えればいいのでしょうか？

パリの貧しい郊外では、若いカトリック信者が、教会の教えについてイスラム教徒の友人と話ができるように、教義を教えてほしいと欲しています。今年の初めには、集会「郊外であなたの信仰を抱きしめよう (*Assume ta foi en banlieue.*)」が開かれました¹⁷。

若者たちは教会の教えの豊かな内容に飢えています。「わが主、わが神」。いい人で、わたしたちが互いに親切にすることを望んでいるイエス像を提供するだけでは、彼らは満足しないでしょう。

わたしたちの社会は、教えに対する深い偏見に悩まされています。アップルの共同創業者であるスティーブ・ジョブズは、2005年にスタンフォード大学で行った入学式のスピーチで、このことを要約しました。「皆さんの時間は限られています。だから他者の生き方でその時間を無駄にしないでください。教義に囚われないでください。それは、他者の思考の結果で生きることになります」。もちろん、その人間は現代の陳腐な教義を繰り返しているだけで、自分の頭で考えていたわけではないのです。

G.K.チェスタトンがこう断言しました。「人間には2種類しかありません。教義を受け入れそれを理解している人間と、教義を受け入れそれを理解していない人間です。……木々は教義をもちません。カブは実に広い心をもっています」¹⁸。現代の教えのいくつかは、まさに酸素のない息苦しい鍵のかかった部屋です。相対主義、あらゆる種類の原理主義、物質主義、国家主義、科学主義、宗教原理主義などです。それらは人々を、小さな恐怖に満ちた想像力の中に閉じ込めてしまいます。

しかし、わたしたちの信仰の偉大な教え、要するに、わたしたちの信仰箇条は、わたしたちの心の扉を開いてくれます。それらはわたしたちを小さな答えの向こう側へと押しやり、無限の愛と真理であり、永遠にわたしたちの理解を超える方への、果てしない探求へと駆り立てるのです。わたしが若い修道士だった60年代後半、すべてが崩壊しそうになったとき、わたしたちのほとんどが修道会にどまったのは、信仰箇条の輝くような美しさを垣間見たからです。若い人たちは、それ以下のものでは満足できないでしょう。

わたしたちはどのようにして、現代の人々を、わたしたちの信仰の広々とした空間へと誘うことができるでしょうか。たとえば、三位一体の輝かしい教義、すなわち、もっとも地に足のついた実践的な教えを、どのように彼らの想像力に触れさせることができるでしょうか。そのためには神学者の助けが必要です。

神学者もまた、神の民との会話を恐れて、学問という鍵のかかった部屋に閉じこもることがあります。わたしが若い修道者としてパリに留学していたとき、他のドミニコ会士に、博士号は何ですかと尋ねました。彼はこう答えました。「若い兄弟よ（彼はわたしよりちょうど1歳年上でした）、説明し

¹⁷アルノー・ベヴィラクア「パリ郊外の若いカトリック信者の大いなる目覚め」、『ラ・クロワ・インターナショナル』2024年3月22日号。

¹⁸G. K. CHESTERTON, "The Mercy of Mr. Arnold Bennett" *Fancies vs. Fads*, Dodd, Mead and Company, New York, 1923: http://www.gkc.org.uk/gkc/books/Fancies_Versis_Fads.txt.

ようとは思いません。あなたには理解できないでしょう」。20年後、わたしは総長としての訪問で再訪し、彼に会っても何も言いませんでした！

もちろん、聖パウロがいうところの「信仰による従順」(ローマ1・5)にわたしたちを導いてくれる学業に優れた神学者、すなわち釈義学者、文献学者、歴史学者も必要です。そうでなければ、わたしたちは聖書を神のためではなく、わたしたち自身の目的のために用いてしまうでしょう。しかし、この厳しい学問の鍛錬は、結局のところ、同時代の人々との会話に役立つものであり、神の愛の無限の神秘への旅に同行するためのものなのです。

前会期の総会の翌日、教皇フランシスコは、他の信仰箇条をもつ人々と慈善的に対話する神学を求めました。彼はアルゼンチン・カトリック大学の学生たちに語ったことばを引用しました。「机上の神学に甘んじてはなりません。思索の場を未知の領域にしましょう。……良い神学者は、良い牧者のように、人々や街角の匂いを嗅ぎ、その内省によって、男女の傷に油やワインを注ぐのです」¹⁹。

優れた神学は、固く閉ざされた部屋の扉を開きます。トマスのように、それは情熱的で恐れを知りません。新しい語り方、新しい言語を受け入れます。宣教するシノドスの教会は、大胆かつ謙虚に教える勇気をもつのです。

¹⁹FRANCIS, *Ad theologiam promovendam*, November 1st 2023.

世界代表司教会議第 16 回通常総会

第 2 会期

黙想会③

2024 年 10 月 1 日 (火)

ティモシー・ラドクリフ神父 (ドミニコ会)

復活の漁

ヨハネ 21・1-14

「その夜は何もとれなかった」。復活のご出現のこれら 1 回 1 回は、どれも暗闇から始まります。マグダラのマリアにとって、それは主が復活されたことを知らない暗闇でした。しかし、主はそこで彼女を待っています。鍵のかかった部屋にいた弟子たちにとって、それは恐怖の暗闇でした。キリストは復活の主日に夜を征服して復活しましたが、わたしたちは何度も繰り返し、暗闇に戻ってしまいます。戦争の闇、性虐待の危機などなど、です。

漁に出た弟子たちを包む夜とは何でしょう？ わたしたちは普段の世界に戻っています。ペトロは「漁に行く」と言います。彼らは以前の日常に戻っています。まるでエルサレムで何事もなかったかのようです。網は空っぽです。空っぽなのです。見知らぬ人が、何か食べるものはないかと尋ね、彼らは「ありません」と答えます。ギリシア語では、Ου (いいえ) です。このことばは、彼らと同じように空っぽです。Ου！ 人間の漁師は一番小さな魚さえとることはできません。

わたしたちは皆、何も成し遂げられそうにない瞬間を知っています。最初の熱意は冷めてしまいました。第 2 会期を迎えるにあたり、そう感じている人もいるに違いありません。熱意と興奮に包まれて始めた人たちは、どこへも行けないのではないかと思っているかもしれません。自分たちが何かできると決して信じなかった人もいます。Ου！ この 11 カ月間、シノドスについてわたしが受けたもっとも一般的な質問は、懐疑的なものでした。つまり、何か成し遂げたのか？ 時間とお金の無駄ではないのか？ というものです。

しかし、見知らぬ人は、弟子たちが彼を見つける前から岸にいます。わたしたちが気づく前に、神はいつも先にそこにいるのです。『聖ベネディクトの戒律』の序で、神はこう言います。「わたしの目はあなたを見つめ、わたしの耳はあなたの祈りに開かれています。そして、あなたがたが呼ぶ前に、わたしは『見よ、わたしはここにいる』と言うでしょう」¹。神は、わたしたちが祈る前から待っています。

なぜ彼らはイエスだと分からないのでしょうか？ これは、学者が理解しがたい論文を書くような曖昧な問いの一つだと思うかもしれませんが、このシノドスにおけるわたしたちに深く関係しています。今日、わたしたちとともにおられるにもかかわらず、わたしたちに見えていない主を、どのようにすれば認識できるのでしょうか？

見た目が変わったからではありません。そうではなく、それまでまったく一度も見たことがなかったからなのです。ハーバート・マッケイブ神父 (ドミニコ会) はこのことをうまく表現しています。

「人々は単にイエスのことを、殺されたと彼らが理解している人物だとは認識していないだけなので

¹ 『聖ベネディクトの戒律』序。W.K.ローサー・クラーク。ロンドン：S.P.C.K., 1931

す。彼らはイエスを、なんとなく知っていて、知っていると思っていたものの、今に至るまで、本当には知らなかった人物として認識しているのです²。彼こそ、受肉した愛の神秘であり、彼らはやつと今、すべての理解を超える愛の高さと深さを垣間見始めているのです。愛すべき弟子が「主だ」と叫ぶのは、彼が愛に満ちた目をもっているからです。初期の神学者たちは、なぜイエスはポンティオ・ピラトのように敵の前に現れなかったのかとよく問いました。たとえイエスがピラトの前で飛び跳ねたとしても、ピラトはイエスを見ることができなかつたでしょう。

愛は「成長することばであり、その意義は変化し、発展していくものです」³。子どものころわたしたちは、母親の愛とは、わたしたちが食べ物を要求したときにそれを与えてくれること、そして決してわたしたちを一人にしないことだと思っていました。成長するにつれてわたしたちは、ときに愛は不在となること、また、iPhoneのようにあなたが望むものを与えないことを要求するのだと、理解するようになります。

2012年、ジャン＝ジョセフ・ララストというフランス人ドミニコ会士が列福され (beatified) しました。また、BBCは「美化された (beautified)」と表現しました！ 彼の人生がひっくり返ったのは1864年、女性刑務所を訪れたときでした。彼女たちのほとんどは売春婦か嬰兒殺しを犯した人でした。彼は彼女たちを見て言いました。「わたしの姉妹たち」。彼はシスターの修道会を設立し、彼女たちが他の女性たちとともに生活できるようにしたのです。多くの、敬虔で、高貴な人々は嫌悪感を抱きました。彼らはまだ、愛の行動を理解することを学んでいなかつたのです。彼らは岸に立つ、見知らぬ人を認識できなかつたのです。

聖書学者たちは、図書館で何時間も沈黙を守って、曖昧な死語を研究しています。これは時間の無駄だと見る人もいますが、これも愛の行為なのです。わたしたちがシノドスに集うのは、妥協点を交渉するためでも、反対派をバッシングするためでもありません。わたしたちは、この「愛」という奇妙なことばの意味を互いに学び合うためにここにいるのです。わたしたちの誰もが、岸に立つ見知らぬ人を見て、「主だ」と叫ぶ、特別なたまものをもつ愛する弟子なのです。

転機は、彼らが主の声に従い、反対側に網を投げるときです。それは無意味なことに思えます。漁のことを知っているのは彼らなのです。漁のことを何も知らないこの人になぜ従うのでしょうか？ わたしたちは従順のためにこのシノドスに来たのです。多くの人にとって、それは無意味に思えます。わたしたちは昼も夜も労苦し、おそらく何も成し遂げられないだろうと疑っています。しかし、教会は集うように命じ、わたしたちは来ました。わたしたちの中には、獲物はないだろうと思っている人もいますが、わたしたちは舟の反対側に網を投げました。しかし、この従順は、わたしたちの想像を超えた形で実を結ぶかもしれません。

153匹の大きな魚という偉大なパズルがここに 있습니다。この数字に関する驚くべき、そしてしばしば不合理な説明をすれば、何時間でも人を退屈させることができます。なぜ153匹なのか？ 153匹いたに違いないという人もいます。しかし、153匹の魚があちこちに跳ねているのを想像してみてください。また、当時存在したと思われる153の教会を指すという人もいます。また、当時知られていた153の国々を指すという人もいます。これは明らかに豊かさを意味しています。神の豊かな摂理が働いているのです。聖ジョン・ヘンリー・ニューマンは、摂理を「音のない神の働き」と表現しま

²『神、キリスト、そしてわたしたち』94 ページ。

³ハーバート・マッケイブ OP『法、愛、そしてことば』18 ページ。

した。『討議要綱』はイザヤ書からの引用で始まります。「万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒」(25・6)。

み国は、カナの婚宴のぶどう酒のように、陽気さ、過剰さをもって、わたしたちの生活に飛び込んできます。聖ドミニコは宣教を終えて、夜遅くにローマの修道女の修道院に戻ってきました。聖ドミニコは修道女たちを起し、自分の説教について話しました。彼はぶどう酒を頼みました。それは少ししか残っていませんでした。修道女たちはコップをもってきて、彼は修道女たちに、飲み干して、*Bibite satis*、十分に飲んで、と言いながら回しました。そして、コップが空になることはありませんでした。

わたしたちは、神の摂理がこのシノドスを豊かに祝福してくださることを信じなければなりません。「押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量をよくして、ふところに入れてもらえる」(ルカ 6・38)。もしそれを十分に欲するのであれば、わたしたちがここにいるのは、粗末な食事のためではなく、み国の高級料理のためなのです。

ペトロは即座に変容します。このシーンの冒頭、彼は空っぽでした。以前の生活に戻ってしまったのです。まるで何事もなかったかのように。今、彼は立ち上がり、水に飛び込む前に服を着ます。普通、泳ぎに行くときは服を脱ぐものですが、これは父親が放蕩息子を家に帰すときに服を着せるように、彼の尊厳が回復したあかしです。主に恥じているにもかかわらず、彼は友人に向かって泳ぎます。わたしなら、恥ずかしくて反対方向に泳いでいたでしょう。他の弟子たちは漁獲物を陸に揚げようと奮闘し、ペトロは片手でそれを行います。ペトロの秘密は何でしょう？ 彼はどんなことをしても、何度でも主のもとに戻ります。彼の愛は恥よりも強いのです。

イエスは言いました。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」(ヨハネ 12・32)。今、わたしたちは、ペトロが大きな魚でいっぱい網を自分に引き寄せ、網が破れないのを見ています。これは彼の強さによるのではなく、主の引き寄せる力、復活した主の磁力との協力によるものです。破れない網を陸に引き上げるのは、主の引き寄せる力なのです。ペトロの一致の務めは、神の道を踏み外した子らを監視することではありません。わたしたちを引き寄せる主の魅力を明らかにすることなのです。

昨年シノドスに来たとき、伝統主義者と進歩主義者との間の、悪意ある対立を克服することが大きな課題だと思いました。カトリシズムにとって異質な二極化をどのようにいやすのか？ しかし、話を聞いているうちに、さらに根本的な課題があるように思えました。世界のあらゆる文化から魚を集めた網を、どうすれば引き寄せることができるのか？ どうすれば網は破れないのか？です。

1989年にベルリンの壁が崩壊したとき、冷戦は終わったとみなされました。フランシス・フクヤマは『歴史の終わりと最後の人間 (*The End of History and the Last Man*)』⁴を出版し、わたしたちは新時代に突入し、西欧自由民主主義の勝利に到達したと主張しました。どの国も、西洋の生活様式に「進化」する運命にあるように思われました。一部の国、とりわけ南半球の国々は、ただ追いつかなければなりません。これは幻想であって、西洋は徐々に目覚めつつあるところです。その代わりに、わたしたちは多極化した世界に生きており、そこではグローバル・サウスの多くの人々が西洋

⁴ペンギン、ロンドン

を退廃的で破滅的なものとして見ています。わたしたちは「西欧後」の世界に生きているのです⁵。多くの西洋人はまだこのことに気づいていません。

わたしたちは、各文化がそれぞれの母国語で語り、理解される、新たな聖霊降臨を待ち望んでいます。これはシノドス期間中のわたしたちの課題でもあり、引き裂かれ、分裂した世界へのわたしたちの宣教の基盤でもあります。結び目をほどくマリアと、網をほどくペトロの祈りをお願いします！

まず第一に、わたしたちがカトリックであるためには、互いが互いを必要としていることを認識しましょう。この総会に集う多様な文化は、互いにいやしを提供し合い、互いの偏見に挑戦し合い、互いをより深い愛の理解へと呼び覚まします。どの文化にも、岸に立つ見知らぬ人を見て、「主だ」と叫ぶ仕方があります。

たとえば、教皇ベネディクトは、西洋は「一種の精神の病」⁶に、聖ヨハネ・パウロ二世が「死の文化」と呼んだものに苦しんでいると告白しました。わたしたちは死から逃れ、死が決して起こらないように装うか、あるいは死への幫助によって死を支配しようとしています。ペトロのように、わたしたち西洋人は、死に打ち勝った復活の主を岸に見つけるための助けを必要としています。希望をもって死と共存するためには、助けが必要です。

最愛のフランス人ドミニコ会士が、ボゴタでの総会中に亡くなりました。彼の葬儀では、西側から来た兄弟たちは悲しみに打ちひしがれました。コロンビアの若い兄弟はこう抗議しました。「今は死の時ではなく、信仰の時です」⁷。このシノドスの兄弟であるオロバートル神父（イエズス会）は、いのちのたまものに対する深い感覚をもつ、伝統的なアフリカの宗教を実践する両親に育てられたことを感謝しました。彼はこう書いています。「アフリカ全土の宗教体系の中心は、被造物は生きているという深い信念です」⁸。死から隠れていては、生きるとはどういうことかわかりません。死に対して開かれた目を持ち、生きていることの意味をより深く理解している世界の他の地域の兄弟姉妹から、わたしたちは多くのことを学ばなければなりません。

おそらくわたしたちの最大の課題は、教皇ベネディクトが「インターカルチュラリティ」と呼んだものを受け入れることでしょう。これは何を意味するのか、理論的に探求してはなりません。その代わりに、網を想像してみましょう。網は、ロープで結ばれた空の穴で構成されています。空間と絆。その両方がなければ、魚を引き寄せる網は存在しません。

文化が出会うとき、両者の間には空間が残るべきです。消費主義のグローバリゼーションがそうであるように、どちらも他方をむさぼり食うようなことがあってはならないのです。文化の違いを尊重すべきです。*zwischenraum* という素晴らしいドイツ語を思い出してほしいと思います。これは、それぞれがアイデンティティを保ちつつも、他方に対して開かれた、文化間の肥沃な空間です。聖トマス・アクィナスは、愛があるとき、二つは一つになるが、別個のままである、と言いました⁹。

どんな単一の文化も、わたしたちを一つにすることはできません。ラテン語も、トミズムでさえもできないのです！ どの文化もそれぞれのやり方で真理に対して開かれているからこそ、網は破れないのです。ラッツィンガー枢機卿は、1992年に香港で行われた講演の中で、「各人が他者に対して基

⁵オリバー・スチュエンケル『ポスト西洋世界：新興大国はいかにして世界秩序を作り変えるか』ポリティィ、2016年

⁶2009年10月4日、シノドス司教団第2回アフリカ特別総会開会の説教

⁷後の修道会総長、ブルーノ・カドレット神父（ドミニコ会）によるこの出来事を思い出した。

⁸Agbonkhanmeghe E. *Religion and Faith in Africa : Confessions of an animist*, Orbis, New York, 2018, p.16

⁹ST II II 17.3

本的にオープンであることは、わたしたちの魂が真理に触れているという隠された事実によってのみ説明することができます。無数の洞察が、相互補完性と相互関連性を示す一種のモザイクを形成し、構築しているのです。全体であるためには、誰もが互いを必要としています。人間は、あらゆる偉大な文化的成果の相互関連においてのみ、わたしたちの存在の一致と全体性に近づくのです¹⁰。

わたしたちは、どんな文化も超越する信条という共通の信仰によって結ばれています。しかし、ホモウシオス (*homoousios*) をスワヒリ語、ヒンディー語、日本語にどう訳せばいいのでしょうか？確かに、相互の喜び、友情、喜びの共有、さらには笑いによって、網の目をつなぎ合わせる必要があるのでしょう。この異文化間のもっとも魅力的な例のひとつが、16世紀のイエズス会の中国伝道です。この西洋と東洋の出会いは、互いを豊かにする友情によって花開きました。実際、マテオ・リッチの最初の著書は友情に関するものでした。友情は網を編むのです。

しかし、これらの称賛すべきイエズス会士について語るよりも、シノドスでのわたしたちの課題を想像する助けになるように、わたしが自らの修道会で経験した二つの例をざっと見てみようと思います。わたしのお気に入りの場所の一つは、兄弟ゴッドフリー・エンザムジョ神父が創設したベニンの農場です。ここは「ソングイ」と呼ばれ、500年前にこの地域で栄えた偉大なアフリカ帝国にちなんでいます。エンザムジョ神父はアフリカの自宅で農業を学び、カリフォルニアで西洋科学も学びました。ソングイはアフリカと西洋の農業の結晶なのです。誰も欲しがらない1ヘクタールの荒地から始まったこの農場は、今では24ヘクタールに広がり、アフリカ全土、いや世界中の若い農民たちを教育しています。

ここでは無駄なものは何もありません。ハエはレストランの残飯で肥え、それを魚の餌にします。エンザムジョ神父はソングイを、ハエにとってのシェラトンホテルと呼んでいます。すべての動物や植物は相互依存の中で繁栄しています。蚊は神の最上の作品の一つではありませんが、ソングイでは、蚊でさえもいのちのバランスにおいて果たすべき役割があるのです！

ここではエウカリスチアは、感謝の生態系の中で理解されます。エンザムジョ神父は言います。「ミサは太陽、水、土からのたまもの組み合わせです。ワインとは、押しつぶさなければならないブドウからもたらされる苦痛と苦悩であるのですが、それは友情の象徴となるのです」。ソングイは希望を放っています。彼は言います。「生まれるのに時があり、死ぬのに時があります。というのも、それが自然だからです。アフリカは負ける側にいるように見えるかもしれませんが、正直に、わたしが感じるところ、わたしが見るところでは、明日はアフリカの時となります」。

諸文化が友情の中で出会い、希望を生み出すとき、このことが起きます。わたしたちの間のすき間は、互いの喜びと笑いによって埋められます。エンザムジョ神父は、彼の豚がプロジェクトとわたしたちの友情の両方を象徴していると主張します。豚は、わたしのような大きな白いヨークシャーの豚と、彼のような小さな黒いアフリカの豚との交配の結果生まれたものだからです。違いは肥沃さです。

もう一つ簡単な例を挙げましょう。日本人ドミニコ会士の押田成人神父は、自らをイエスに出会った仏教徒であると語りました。彼は富士山の近くにアシュラム（僧院）を設立し、そこでキリスト教徒と仏教徒が共生していました。彼は、抽象的な観念で現実を消し去ろうとする西洋の傾向を嫌悪したのです。彼はこれを「ニワトリの第3の足」と呼びましたが、それは右足でも足でもなく、抽象的

¹⁰ 「キリスト、信仰、そして文化の挑戦」、アジア教理委員会との会合。香港、1993年3月3日。

な存在しない足でした。彼は言いました。「わたしたち日本人は、宗教とは何かを、血の中に染み込むように知っています。カトリック教会はチョコレートの箱でもビジネスでもありません」¹¹。

押田神父は、とりわけ座ったままの生活に慣れた司教たちを対象に黙想会を開いたとき、腰が痛いとか抗議するのをものともせず、水田で田植えをさせることを楽しみにしました。夜明けから日暮れまで懸命に働く農夫は、一粒の米が自分の産物ではなく、自分の努力によって作られたものでもなく、神から与えられたものであることを知っています。その米粒を、隠れているがすべてを与えてくださる神にささげなければなりません。「これはあなたのものです」¹²と言わなければならないのです。

押田神父は西洋文化に大変批判的でしたが、エンザムジョ神父のように、笑い喜びをもって文化の隔たりを越えたのです。彼は神に騙されてキリスト者となり、ドミニコ会士になったと冗談を言うのが好きでした。素晴らしいキリスト者とドミニコ会士に出会って、みんなそうなのだと思ったからだということです。「わたしは間違っていた！ 神に騙されたんだ」と笑いながら話します。

ですから、ペトロの網は空間で満たされ、真理と喜びと歓喜によって保たれています。それは、法律的な力によってではなく、引き上げられるとき、すべてをご自身のもとに引き寄せる主の魅力によって、岸に引き寄せられるのです。美は網を岸に引き寄せます。第二次世界大戦で被害を受けたすべての国々に和解のシンボルである桜の木を送った長崎出身の日本人カトリック信徒、浅利政俊さんのことを考えてみましょう¹³。

神がこのシノドスを、両者が一つになりつつも別個の存在であり続けるような、愛に満ちた文化的出会いで祝福して下さいますように。どんな文化も支配することはできません。しかし、わたしたちは、わたしたちの会話において、力の不均衡がどのように作用しているかを痛感する必要があります。文化の出会いは決して無邪気なものでも、単に頭でっかちなものでもありません。植民地主義はいまだにわたしたちの世界を組織しています。ロバート神父は、アフリカのことわざを紹介しました。「ライオンが文字を書き、話すことを学ぶまで、狩りはつねに狩人を賛美する」¹⁴。ライオンはいまや話していますが、西洋は耳を傾けません。

わたしの若いころの歌によれば、「お金は世界を回します」。わたしたちは「西洋後」の世界に住んでいるかもしれませんが、金融システムはいまだに西洋に支配されています。帝国主義は終わっておらず、いまだにその価値観を他者に押し付けようとしています。しかし、岸の見知らぬ人は、裕福なエリートの一員ではありませんでした。彼は、当時最大の帝国権力によって十字架につけられたのであり、それは奴隷にゆるされた死であり、屈辱を与えるためのものでした。だからわたしたちは、現代の帝国権力によって十字架につけられた人々の声に耳を傾けましょう。互いに謙虚に耳を傾けましょう。今日の午後、わたしたちが出会うのは、謙遜なシモン・ペトロなのです。

¹¹ P.135

¹²クラウディア・マッティエロ『高森草庵：押田成人禅師の教え』ブエノスアイレス、2007年

¹³阿部菜穂子『赤い着物の殉教者』Chatto and Windus, London, 2024.

¹⁴P. xviii

世界代表司教会議第 16 回通常総会
第 2 会期

黙想会④

2024 年 10 月 1 日 (火)

ティモシー・ラドクリフ神父 (ドミニコ会)

復活その 2 : 朝食

ヨハネ 21・15-25

ここでついに、シモン・ペトロがイエスを否定して以来初めて、二人は互いに語り合いました。焼かれているのは、魚なのか、ペトロなのかは定かではありません！ イエスはペトロに「わたしを愛しているか」と尋ねます。イエスを否定したことについては一言も出てきません。重要なのは今、今日なのです。ルカシュ・ポプロ神父 (ドミニコ会) は次のように記しています。「イエスは過去について尋ねたのではないことに注意してください。彼は説明や弁解を求めませんでした。第 2 に、彼は、今後わたしを愛しますか？と、未来についても尋ねません。わたしを愛すると約束してください、と約束を求めることもしません。彼は現在のことを尋ねたのです！ わたしたちはとても頻繁に、過去の失敗や未来の空想にとらわれて、愛についての問いや、それに対応する答えを避けてしまうのです」¹。

『聖務日課 (教会の祈り)』は日々、わたしたちに対する神の願いから始まります。「ああ、今日こそ、わたしの声に耳を傾けてください」。今日という日は唯一存在する日であり、神にとっての現在は、この現在です。シノドス期間中の今日、わたしたちは主と互いの声に耳を傾けなければなりません。遅れてはなりません。そうすれば、今日が新たな始まりとなるでしょう。マルティーニ枢機卿は亡くなる直前、突然こう言って、友人のダミアーノ・モデナ神父を驚かせました。「キリスト教はまだ始まったばかりです」。

なぜ遅れるのでしょうか？ 猜疑心と惰性がわたしたちの足を引っ張るのです。わたしのアイルランドの兄弟たちは、アイルランド語には明日を表す単語が 32 個あると冗談を言いますが、そのどれもが *mañana* (スペイン語の「明日」) のような切迫感を持ちません！ ペトロは岸で主を見たとき、ためらうことなく湖に身を投げ、陸に向かって泳ぎました。 *Carpe Diem* (今を生きろ)。

朝食時の会話は、おそらく聖書の中でもっとも繊細でデリケートなものでしょう。ペトロが以前、炭火の前でイエスを否定したことを恥じているような雰囲気が漂っていますが、はっきりとそのことが語られることはありません。イエスは優しさと、おそらく微笑みさえもって、ペトロが 3 度否定したことを 3 度言い直せるように、そのスペースを開いてくれます。わたしたちは、人の言動の愚かさを思い知らせるのでしょうか。それとも、彼らが前に進めるように、そっとそのスペースを開いてあげるのでしょうか？

「この人たち以上にわたしを愛しているか」。ヨハネがきっと知っていたであろう、マタイ福音書、マルコ福音書では、ペトロは、恥となった夜にまさにそう主張していました。「たとえ、みんながつまみずいても、わたしはつまみずきません」。(マルコ 14・29)。わたしがあなたを一番愛しています！ そ

¹私信。

して今、彼は再びそう言います！ ここでは、アガペーとフィリアという、愛を表す異なることばの意味について多くの議論があります。わたしは、ペトロがイエスを愛しているだけでなく、最高の愛、フィリア、友情でイエスを愛していると主張していると確信しています。「友のために自分のいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」。これこそが、ペトロができなかったことです。「聖書研究所」のアンソニー・ジアンブローネ神父（ドミニコ会）は、ペトロの三つの返事を次のように訳しています²。

「そうです、主よ、わたしは彼らが愛するよりも、そしてわたしが他の人たちを愛するよりも、あなたを愛しています。あなたはそれ以上の存在であり、あなたはわたしの友です」。

そして、「フィレオ（愛しています）とわたしは言いましたし、本心からそう思っています。あなたはわたしの友です」。

結局のところ、「あなたは何もかもご存じです。わたしが、友情の完全な愛をもって愛していることを知っておられます」。

軽い皮肉に注目してください。ペトロは「あなたはご存じです」と言います。その悲しい夜、ペトロはイエスを知っていることを否定しましたが、イエスはペトロを知っているのです。初代教会の伝説によれば、彼はネロ朝の迫害の間に再び失敗を犯します。ローマを逃れたペトロは、その街へと向かうキリストに出会いました。彼は主に尋ねます。どこに行くのですか (*Quo Vadis*)？ 「再び死ぬためです」。ペトロはついに、2度告白して否定した、すべての愛のうち最高のものを示したのです。結局ペトロは、人生の終わりに、愛の誓いに忠実でした。このことは、わたしたちが失敗したときに勇気を与えてくれます。

さて、ここに今回のシノドスにとって、もっとも重要な教訓があります。イエスはペトロを信頼し、群れを託しました。教会は、シモン・ペトロに対する神の無償の信頼という岩の上に築かれているのです。多少の失敗はあっても、わたしたちは、互いを信頼する勇気があるでしょうか？ このシノドスはそれにかかっているのです。

一例を挙げれば、教理省教令『フィドゥーシア・スプリカンスー祝福の司牧的意義について』が世界中の多くの司教たちに苦悩と怒りを引き起こしたことは周知の事実です。このシノドスのメンバーの中には、裏切られたと感じた人もいました。しかし、わたしたちが主のように、たとえ傷つけられたとしても、互いに信頼し合うというリスクを負ってこそ、教会は信頼に足る共同体となるのです。主は、わたしたちが何度も何度も主を裏切りながらも、毎回のエウカリスチアで、何度も何度もわたしたちの手にご自身をゆだねてくれます。性虐待の危機は、これが他者、とりわけ未成年者を危険にさらす、無責任な信託であってはならないということを、わたしたちに痛切に教えました。そうではなくて、傷つくという、わたしたち自身のリスクを受け入れる信託でなければなりません。

世界的な信頼の危機です。どの政党の政治家も、他の政党の政治家は信用できないと言い、もちろん誰も政治家を信用しなくなっています。世界中で若者が民主主義への信頼を失っています。フェイクニュースやメディアの操作によって、真実が伝えられていることを信用できなくなっています。わたしたちはますます多くの説明責任、より多くの検査や報告を求めますが、誰かが何かを企んでいるのではないかという疑念を和らげることはできません。信頼の危機は、他の誰もがそうしているのだからと、人々が信頼に値しない行動をとるよう誘います。アレクサンドリアのクレメンスは3世紀

² 『聖書と祭司職：罪のための一つのいけにえへの祭司的参加』 Baker Academic, Grand Rapids, 2022, p.185f.

に、わたしたちは「神の宿営に入るといふ、すばらしい危険を冒さなければなりません」³と書いています。神の宿営とは、たとえそれが愚かに思えるときでも、主と互いを信頼する人たちの宿営のことです。「傷つくリスクは、2度と冒さない」とは言えません。

ある農夫がアシジの聖フランシスコに駆け寄り、あなたはフランシスコかと尋ねました。その農夫は言いました。「多くの人々があなたに信頼を寄せているのですから、見かけ通りの人でいてください」。

このことばはわたしを悩ませます。せめて彼らさえ分かってくれていれば！ 何百万人もの人々もはやわたしたちを信頼していません。今回の総会を通して、互いから始めて、わたしたちは再び信頼を築かなければならないのです。

わたしがドミニコ会総長に選ばれたとき、前任者の素晴らしいアイルランド人に助言を求めました。彼は言いました。「まず、人里離れた場所を旅行するときは、つねにトイレの紙を後ろポケットに入れておくこと（とても賢明です！）。第2に、兄弟たちを信頼してください。修道会はあなたを信頼することを決議しました。あなたは兄弟たちを信頼しなければなりません。管区長たちはときとして、あなたを困惑させ、あなたが同意しない決定を下すこともあります。例外的な場合を除いて、彼らを信頼してください」。聖ドミニコは修練者たちを信頼し、シトー会士たちは、彼らは全員逃げ出してしまうと確信していたのですが、彼らを宣教に送り出しました。信頼は、ペトロの網を一つに結びつけるのです。

管区長の一人は立派な兄弟でしたが、アルコール依存症と闘っていました。驚いたことに、彼は再任されたのです。わたしは、管区総会がリスクを冒して選挙を承認したことを誇りに思いました。わたしはアメリカ人ドミニコ会士が飲酒の問題を抱えていたことを思い出しましたが、それで彼は医師の診察を受けに行きました。医師は告げました。「神父様、あなたができる最高の策は、酒を完全に断つことでしょう」。兄弟は答えました。「先生、わたしには最高のものはふさわしくありません。次善の策は何ですか？」。

結局のところ、すべては自らをわたしたちにゆだねてくださる神への信頼の上に成り立っているのです。たとえそれがどのようなものであるか予想できず、わたしたちが望むようなものでないかもしれないとしても、神の恵みによって、このシノドスが実を結ぶことをわたしたちは信じています。

テイヤール・ド・シャルダンの詩。

何よりも、神のゆっくりとしたわざを信頼することだ。

わたしたちは何事においても、遅滞なく終わらせようとして、自然と焦ってしまう。

途中の段階をスキップしようとする。

未知のもの、新しいものへと向かう途中であることに焦ってしまう。

しかし、それがすべての進歩の法則である

いくつかの不安定な段階を通過しながらなしとげられる――

非常に長い時間がかかることもあるのだ⁴。

³ *Proteptique X*, 93.引用 : A.G. p. 128

⁴ 「姪に宛てた手紙」、*Hearts on Fire*, ed. マイケル・ハーターSJ、ロヨラ・プレス、2009年

もう一人のイエズス会士、グレゴリー・ボイル神父（わたしは寛大な気分だ！）はこう言います。「わたしたちの神は、待つ神です。わたしたちにできないわけがありません。大きな転換にはそれなりの時間がかかります。それを待ちましょう」⁵。

イエスはペトロに羊を牧するよう託しました。わたしの羊、とイエスは呼び、あなたがたの羊とは言いません。ペトロはよい羊飼いであり、羊たちを羊小屋という狭い場所から連れ出し、狼が待ち構えるこの世の広い牧草地で餌を与えるのです。彼は自分の群れをそれぞれの名前で知っており、羊たちは彼の声を信頼します。王であるキリストのうちに洗礼を受けた人は皆、牧者となるよう招かれています。家族の小さな群れ、学校の生徒たち、隣近所の人々に対する牧者です。両親、教師、信徒の指導者たちは皆、自分の羊の名前を知り、信頼を得る牧者となるよう招かれています。わたしたちは皆、主の羊の世話をするという特別な責任を負っているのです。

しかし、イエスはペトロに、よい羊飼いとして共同体における特定の役割を与えます。これはとくに、わたしたち叙階された司牧者の役割であり、狭い内向きな教會的な羊小屋から、広く開かれた世界へと羊たちを導くことです。香部屋から公共の場へ。しかし、しばしば、シノドスの道をもっとも疑い、抵抗するのは聖職者であることが分かっています。ペトロとその後継者たちがこう行動する、どういった権限があるのでしょうか？

エジンバラ大学のサラ・パルビス教授は、「ペトロの権威は、悔い改めた罪びとの権威である」と書いています⁶。ペトロが神の恵みの牧場に群れを導くことができるのは、彼自身が明らかに神の恵みを必要としているからです。教皇フランシスコは2015年のインタビューでこう語っています。「わたしは罪びとです……確かに、そうです。主があわれみをもって見つめてくださる罪びとです。ボリビアで勾留者に語ったように、わたしはゆるされた人間なのです」⁷（ルカ5・8参照）。これは羊飼いたちの、喜びに満ちた権威です。わたしたちはゆるされた人間です。優越の重い仮面や、恐ろしいほど聖なるものであるふりをする重荷を捨てることのできるのです。司祭は、エウカリスチアの冒頭で、わたしたち全員を一致に導き、「わたしたちの罪」を思い起こさせます！これがわたしたちの一致であり、恵み深いゆるしなのです。ほとんどの修道会で、制服を受けるとき、「あなたは何を求めているのですか」と問われます。その答えは、「神のいつくしみと、あなたのいつくしみです」となります。

悔い改めた罪びとの喜びは、神の愛に満ちた裁きの夜明けの光の中に足を踏み入れ、自分が完全に愛されていることを発見することです。バジル・ヒューム枢機卿は、こう述べました。『『裁きとは、いつくしみ深く、あわれみ深い神の耳に、わたしがこれまで語ることのできなかった人生の物語をささやくこと』⁸。……わたしたちの多くは、これまで誰にも語ることのできなかった物語、あるいはその一部をもっています。誤解されることを恐れたり、自分自身を理解できなかつたり、隠された人生の暗黒面を知らなかつたり、あるいは単に恥ずかしかつたりするために、多くの人にとってそれはとても難しいことです……。いつくしみ深く、愛に満ちたその耳に、自由に、そして完全にささやくことができるようになれば、どんなに救われることだろう。結局のところ、それこそが、主がいつも望んでいることなのです」⁹。

⁵ 『心のタトゥー』 p.113

⁶ 私信。

⁷ *Credere*,

⁸ 無名の神父のことばをの引用。

⁹ 『巡礼者であるために』 p.228.

岸で、ペトロはまだ、自分自身のゆるしの必要を語る準備ができていませんでした。いつかその日が来ます。ペトロがイエスを否定したことについての最初の記述はマルコの福音書にあり、それはしばしばペトロの回想録とも呼ばれています。聖マルコがペトロの失敗を知っていたのは、ペトロがそれをローマの共同体と共有していたからです。ネロ朝の迫害の間、教会はほとんど崩壊し、キリスト者たちは互いを裏切っていました。そのときペトロは、自分の失敗を認めたようです。「あなたは主を裏切った。わたしもそうだった」。『討議要綱』は、わたしたちはしばしば、神の民が聖職位階に対して責任を負うことを要求してきましたが、聖職位階も神の民に対して責任を負わなければならないと述べています(75, 76項)。もっとも暗いときに、ペトロは自分の民に自らのことを説明しました。これがペトロの恥を喜びに変えたのです。これこそ羊飼いの一致の奉仕職であり、わたしたちが「あえて主の祈りを唱える」よう、一緒に集うのです。このように、聖職者のエリート主義とは、単に謙遜さの欠如ではなく、司祭としてのアイデンティティを否定することになります。それは、自分の仕事は花々を引き抜くことだと思っている庭師のようです。

ペトロは最後には、その最大の愛の行いを成し遂げます。「友のために自分のいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」。司祭は神の友愛の奉仕者です。『討議要綱』は、司祭がしばしば「ある種の疲労感、とりわけ孤立感、孤独感、健全で持続可能な人間関係から切り離されること、あらゆるニーズに回答が求められることに圧倒されること」(35項)を口にしてしていると警告しています。シノドスは、すでに耐えがたいほど多忙な人々によって、なすべきことが一つ増えたように見えます。

司祭の誘惑は、一匹狼になって、何でも自分でやってしまうことです。しかし、これは司祭の召命である、友情への招きとは矛盾します。つまり、神の友であり、信徒との友情、周縁部にいる人との友情、司祭団の他の司祭との友情への招きです。聖大アントニオは、透明性を獲得したため、砂漠の中ですべての人の友となりました。ピーター・ブラウン教授はこう記しています。「彼はすべての人に対して、人を引きつける魅力とオープンさを放つようになり、弟子たち、巡回修道士たち、信徒の巡礼者たちの群衆に囲まれている彼の前に現れた見知らぬ人は誰でも、誰が大アントニオであるかを知ることになりました。彼は、他者に対する完全な透明性を獲得した心をもつ人物として、すぐに認識できる人でした」¹⁰。

だからこそ、透明性と説明責任の欠如は、司祭としてのアイデンティティの根幹を腐敗させるものです。罪びとであるペトロの透明性は、彼の権威の基礎であり、隠蔽は許されません。わたしたちはすべての罪を公然と告白することを期待されているわけではありませんが、少なくとも偽善者であってはなりません。神の民は、偽善以外のすべてを速やかにゆるすのです。

「友のために自分のいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」。多くの司祭は、すべてをささげ、燃え尽き、疲れ果てて、自分のいのちをまさに捨てることを、実際現実に実感しています。英国のショーン・コノリー神父は若い頃、次のように書いていました。「ときおり、わたしは巨大なスポンジのように、彼らの困難や試練を吸収しているように感じます。問題は、多くの場合、自分自身を絞り出す場がどこにもないことで、だから、すべてがどんどん蓄積されていくのです」¹¹。彼には、自分の人生を取り戻したいと思って、司祭職を辞めてしまった友が数人います。教師たちは、週の終わり、彼に叫びます。「よい週末を」。お願いですから、よい週末を過ごしてください！彼は言いま

¹⁰ Michael Heher, *The Lost Art of Waling on Water*, p.70、からの引用。

¹¹ 『シンプルな神』 ロンドン 2001年 27 ページ。

す。「ときおり、金曜の午後に車で家に帰るとき、自分自身の生活を取り戻せたらいいんじゃないかな、と思うことがあります」¹²。

イエスは、「わたしが来たのは、あなたがたが生き延び、しかも豊かに生き延びるためである」とは言っていません。聖イレネオの次のことばを思い起こしましょう。「神の栄光とは、十全に生きている人間のことである (*Gloria Dei est homo vivens*)」。自分のいのちを捨てるとは、日記を捨てることとは違います。何でも自分自身でやってしまうことではありません。ラッツィンガー枢機卿は、ヨハネ・パウロ二世の葬儀の席で、次のことばを引用しました。「『他の人に帯を締められるだろう』。そして、この苦しむ主との交わりの中で、疲れを知らず、新たな熱意をもって、彼は、世の終わりまで続くその愛の神秘である福音をのべ伝えました (ヨハネ 13・1 参照)」。自分のいのちを捨てることは、一つの愛の行為であり、終わりのない仕事ではありません。友情とは、人々とともにいることを学び、彼らに同伴することを喜ぶことです。それは、イエスが娼婦や徴税人たちと祝宴を催したときのように、余暇と談笑を分かち合うことなのです。

だから、ペトロは悔い改めた罪びとの権威をもっているのです。しかし、この箇所では、これだけが唯一の権威ではありません。イエスはペトロに「わたしに従いなさい」と命じます。ペトロは、イエスが愛し、すでに主に従っている弟子を見ます。「この人はどうなるのでしょうか？」と、ペトロは尋ねます。「あなたに何の関係があるか？」と、イエスは答えました。イエスの愛する弟子には、その権威があります。彼は空の墓を見て信じました。わたしたちは彼の証言を研究しており、「彼のあかしが真実であることを知っている」(24 節) のです。イエスは十字架上で、ご自分の母の世話をその弟子の手にゆだねました。

それぞれが相手の権威を尊重します。ペトロは、イエスが死ぬ前夜、誰が裏切るかをイエスに尋ねるよう、最愛の弟子に頼んだとき、その権威を認めました。ペトロを大祭司の家に入れる権威をもっていたのは、おそらく最愛の弟子でしょう。しかし、最愛の弟子もペトロに従います。彼は墓に駆けつけ、先に墓に着くのですが、ペトロが年長者であることを尊重し、先に墓に入れます。

牧者の役割とは、自らを慎み、世話をするすべての人の権威を尊重することです。誰もが何かを提供できるのです。ビンセント・ドノバン神父は、東アフリカのマサイ族とともに働く宣教司祭でした。長い間、彼は自分の司祭としての役割について悩んでいました。彼は次のことに気づいたので、「自分は共同体の中でもっとも神学を知っている人間、神学者ではありません。共同体の説教者でも宣教者でもありません。預言者でもない。その共同体が将来できるようになるかもしれない、もっとも重要な貢献を実行できる人という意味で、彼は共同体の中で最重要メンバーでもないでしょう。しかし、彼は共同体全体の中心的存在であり、祈りであれ、奉仕活動であれ、共同体が行動できるようにする存在です。……彼は、外、すなわち普遍教会との一致のしるしとなりえます」¹³。

最愛の弟子の後継者とは、岸で見知らぬ人を見つけ、「主だ」と宣言するために目を開かれたすべての人のことです。コルカタのマザー・テレサは、コルカタの路上で死にゆく主を見ました。マグダラのマリアもまた、復活した主が最初に語りかけた人間として、使徒の中の使徒として、その権威を有しています。彼女の優しい愛は、主の臨在に出会うために彼女を開きます。トマスは、真理への情熱ゆえに権威をもっています。それぞれが他者に従うのです。ライバル意識は教会における優れた権威の敵となります。ある砂漠の聖なる隠修士は、悪魔の群れの攻撃をすべて退けました。しかし、サタ

¹² 同、p.42。

¹³ ヴィンセント・J・ドノヴァン『キリスト教再発見：マサイからの手紙』ロンドン 1978 p.144f

ンがやってきて、彼の耳元でこうささやきました。「あなたの兄弟はアレキサンドリアの司教になりました!」。聖なる隠修士は怒りを爆発させます。サタンは言いました!「そういうものです」。

ですから、このシノドスにおいて、わたしたちが互いの権威を識別し、それにゆだねることができるよう。教会が彼らの権威を認め、その行使を委託するためには、どのような新しい奉仕職が必要でしょうか? 福音は、当時、権威をもって行動した多くの人々に光を当てています。今日、わたしたちも、そうできますように。というのも、今日は、わたしたちが有する唯一の日だからです。

Carpe Diem! (今を生きろ)